

知見の囲炉裏端

大学ミュージアムが面白い・・北大第2 農場



技術経営士の会 藤井 利侑



大学を卒業して50年が経ち、企業勤めも終えて、目下は経営 & 技術コンサルタント業を自営しています。そしてその活動の本拠地は企業活動をしていた関東と、故郷札幌に置くこととしました。

関東での活動は日本の多くの企業が集積しているのだから当然として、札幌には自分を育ててくれた故郷なので何か役に立ちたいとの思いがあったのと、これから迎える第2の人生の日々を旧友たちとの交流を大切に楽しく過ごしたいと思ったからでした。

そうして一年の4ヶ月くらいを札幌で過ごしてもう4年ほど経ちます。

そんなある日に、大学時代からの親友の一人から「北大博物館のボランティア」を引き受けないかという話が舞い込んできました。北大の博物館にはそれまでも何度か足を運んだことがあり、多くの動物標本や植物標本、各学部の研究の歴史展示など興味深い展示物がたくさんあったことを思い出し引き受けてみようという気になりました。

大学ミュージアムは近年多くの大学に設置されていて、各大学の特徴ある研究資料が展示されていますのでお勧めですが、やはり総合大学である東大、京大、北大は歴史もあり研究にも地域特性があり自然科学系研究学部を有しているだけに面白いと思います。最近NHK BSなどで、スペシャル企画として放送されているほどです。

東京大学博物館ではシーボルトの残した植物標本や江戸時代後期の日本最古の虫標本（虫偏の生き物は蜥蜴など昆虫ではありません）などが紹介されていました。また100年以上前に東大のある本郷で採取された植物や昆虫の標本から、当時の本郷がいかに自然豊かで、たくさんのわが国古来の植物や昆虫が生息していたかが判ります。

明治後の都市化による自然の破壊を感じてあらためて保護の大切さを感じる事が出来るものでした。

北大博物館のボランティアには多くの方が関わっています。植物標本、昆虫標本、菌類標本、考古学、化石、水産、歴史展示などに分類されていますが私が参加したのは「第2農場」です。他大学のミュージアムでは展示の多くが研究資料、標本、化石などであり、おそらく農場そのものをミュージアム施設として公開しているのは北大だけだろうと思います。北大の敷地は南北に約1.6km程度ありますが、第2農場は観光などで皆さんが訪れる中央部のメインストリート北端にあります。そしてその中の建築群は国の重要文化財に指定されています。重要文化財建築群を持つ大学は他にほとんどないかと思えます。

建築群のうち古いものは1877、1877年に建築されて、その後1910年に現在の場所に移転された4棟で、それらは既に築後140年以上経ちます。

1877年はクラーク博士が札幌農学校教頭として北海道にやってきた年で、これらの建築には博士が北海道に新しいアメリカ東海岸様式の酪農を根付かせようとする思いが詰まっています。寒冷で農作に適さない当時の北海道では酪農が開発に最も適しているとクラーク博士は考えました。

最初の4棟の他にも大小合わせて8棟の建築群がありますがそれらは1909～1912年に完成したもので、博士の帰国後にその酪農を实践しようとして建てられたものです。上の写真の赤い屋根の建物は1909年建築の牝牛舎で、今でもしっかりした木造造りの美しい建物です。床も木が張られて、当時はあまり温度管理がされない牛舎では牛の寒さを気遣う珍しいものでした。



左の写真はクラーク博士の考えを实践するために建てられたモデルバーンで1階が繋ぎ飼育式の牛舎、2階は牧草（乾草）を貯蔵する施設です。酪農はその後進歩して牧草貯蔵はサイロ方式から現在の牧場で目にするロールバール方式となり、それに伴い効率的な餌やりと搾乳をするように牛舎も進歩しているそうです。

第2農場ボランティアの見習いとして先生の話聞いて驚いたことは、今は牛を育ててたくさんの肉と牛乳を生産するために穀物飼料をたくさん与えているが、牛は本来穀物を食べる動物ではないので、そのせいで病気で短命になったり、生殖行動が取れない事例が多いという説明でした。確かに狭い牛舎の中で穀物をたくさん与える育成生産方式はクラーク博士が日本で実現しようとしていた酪農とは全く違うように思いました。現在、北大ではこのことに気づいて牛にストレスないように、広い牧場で育てて、牧場の草を餌として飼育して、美味しい牛肉を生産し美味しい乳製品を作って、生産量が多少減っても経営が成り立つ研究を進めているそうです。

私たちは霜降り和牛が美味しいと言って食べたりしますが、その育成方法は決して牛に優しくないと思うので、考え直す必要がるように思いました。そんな風に考えていたらNHKが岩手県のある生産者に注目して、北大の先生と同じように考えて、山を切り拓いてそこを放牧地とする山地酪農を实践し、それに着目した若い酪農志願者が集っていると報じていました。

さらに別の機会には豚の育成でも私たちがよく目にする豚舎ではなく広い牧場で放牧（放豚？）することで美味しい豚が育つことを実践している帯広の養豚家のことも耳にしました。

今、環境や人権を重要な視点としてSDG'sが問われています。畜産業にもサステナブルな視点からの新しい視点が必要な時代だと感じざるを得ません。

私としては何となく友人に誘われて参加することになったボランティア活動ですが、新しい価値観から社会を見ることが出来る機会を貰ったことに感謝して、環境と農業に興味を持って考えてみようと思った機会でした。